即時停戦を！

上：何も残っていないガザ市の街
道路の両側にあった建物が跡形もなくなり道幅が広がっている
（N さん提供の写真を 2 枚つなぎ合わせた）

左：避難する人たち (現地職員提供)

ガザはどうなっているのか
人々の生活は ——

当会の現地職員やこれまでガザから来日したことのある知人たちも、幸いなことに生存が確認できていて、エジプトに出国した人や南部で避難生活をしている人もいます。ほとんどの人が肉親を亡くしていました。また全員が家を無くしています。

しかし、支援をしてきた子どもたちや家族の安否は依然として分かりません。特に心配なのは障がいのある人たちや妊娠していた女性たちです。障がいのある人の多くはいまも北部にとどまっているとみられます。

ガザ北部にとどまる N さんのお話

「9 回も避難先を変えています」「これは虐殺です」

南部に避難した人たちについては、当会の YouTube などで職員のハリールさんの声を紹介していますが、ほとんど報道されていない北部の様子をパート職員の N さんから聞きました。

彼女はガザ市に住んでいましたが、イスラエル軍による住民の南部への退避呼びかけはガザ北部から始まり、彼女の住む地域に退避呼びかけがあった頃には簡単には逃げられない状況だったため、高齢の両親たちと北部にとどまっています。

「10 月以降、私たちは避難先を 9 回も転々としています。今は知人の親族のところに身を寄せていますが、お金を払って何とか頼み込んで住まわせてもらっています。半分壊れた建物の地下のようなところで、8 人の子どもを含む 25 人が狭い空間に身を寄せ合っています。窓もなく電気もないため、夜は真っ暗で恐怖しか感じません。もちろんプライバシーなんかありません。最近もイスラエル軍の戦車が表通りを通過し、私たちは急いで裏側の通りから逃げました。幸い戦車はこの建物を素通りしたので、しばらくして戻りました。

私は弟を二人失くしています。弟の子どもたちは「お父さんはどこ？」と聞き続け、食事をとろうとしません。妹の一家は何とか南部にたどり着きましたが、我が家には車がなく、南部に移動するのには 1000 シェケル (4 万円) とか 2000 シェケルと言われ、二の足を踏んでしまいました。そのうちに車での移動が禁じられ徒歩でないと退避できなくなり、脚の悪い母は“私は無理だ”と言いました。

両親は糖尿病や肺の病気のほか、歩行困難や軽い認知症、その上に息子たちを失ったショックでひどく弱っているからです。また弟が残した妻や幼い子どもたちがいます。こうした人たちを連れて退避することはほとんど不可能です。

検問所を通る時には、手を上げないとならないので、荷物を持つこともできません。また、南部でも爆撃がひどくなっています。北部にいても南部に逃げても、いつ死んでしまうか分からないため、北部に残ったのです。そして、想像もしなかったような体験をし、たくさんの凄惨な遺体を目にしました。」

「日本の皆さんに何をお伝えしたらよいのか、言葉がありません。でもこれは虐殺です。通信手段もなく私たちは世界から切り離されていますが、私たちが虐殺されているだけでなく、虐殺されているのは皆さんを含む世界だと思います。」

北部と南部を分けるワディ・ガザという枯れ川には、イスラエル軍の検問所があって、そこを通る際には徒歩で 1 キロ近く歩かねばならず、また手を上げていないと射撃されると聞きました。そのため、付近には多くの遺体があり、それが放置されたままになっているという話が伝えられています。

ガザの北部では、退避できなかった人たちがかなりたくさん残っていて、破壊を免れている建物や半壊の建物に暮らしています。攻撃がない時間には、道端に露店がたくさん出て、現金を得るため多くの人が手持ちのものを売っています。ただし価格が大変上がっていて、小麦粉の値段が以前の 10 倍近くになっているそうです。開いている薬局があり、ある程度の薬も買えますが、値段は 2 倍以上です。

左：国連施設前で店番している子どもたち
右：北部の道端での販売風景
（N さん撮影）

診療所の待合室

ラファ郊外で診療所稼働中！

ラファ郊外では診療所を支援しています。近隣に医療機関がないため、本来は母子保健中心でしたが、現在はあらゆる患者を診ています。

バッサム医師

朝から多くの人が並んで受診を待っていて、毎日平均して子ども 100 人以上、大人 120 人、妊婦 40 人、歯科 50 人が受診しています。

子どもは発熱や下痢・嘔吐、皮膚炎などが多く、大人も胃腸病、呼吸器、皮膚炎、泌尿器感染症、肝炎、高血圧や心臓病、糖尿病などです。

妊婦には基本的な検査をしています。医薬品や機材の不足もありますが、可能な医療の提供し、心理サポートや栄養支援などできるだけ普段と変わらないサービスを続けてます。
非常に厳しい状況ですが、穏やかで落ち着いた人柄の責任者のバッサム医師が、患者さんやスタッフの心理的な安定と苦難への耐性を支えています。

アトファルナろう学校とナワール児童館

「アトファルナろう学校はどうなっているのか？」多くの方が心配されていると思います。10 月 7 日以降学校は休校状態です。スタッフの多くは南部に避難して、避難場所で子ども支援の活動をしたり、障がい者への物資配布を行ってきました。一方で、ガザ市にあるアトファルナの学校や幼稚園、クラフトショップなどがあるエリア一帯は、職員が近づけない危険な状態で、公式な発表はされていませんが、当会では、現地の人が撮影した最近の様子を入手しました (左写真 /12 月 24 日)。残念なことに建物にはかなりの損害が見られます。31 年前に日本の支援で始まったろう学校がこんな様子になってしまい、まさに「心が折れる」思いがします。聴覚障がいのある人たちの多くはまだ北部に残っているということですが、通信手段の問題もあり話を聞くことはかないません。

ハンユニスのナワール児童館は、12 月の途中まで多くの避難民を受け入れていましたが、ハンユニスへの空爆と地上侵攻が激しくなって、全員が退避しました。建物は残っているそうですが、内部はかなり破壊されたということです。運営スタッフたちは海岸寄りに避難して、困窮している人たちへの現金給付などを継続しています。現地では以前から、銀行口座がなくても携帯電話を使う電子マネー (日本の●ペイのようなもの) が活用されていました。今回の現金給付もこの電子マネーを使っています。煮炊きに使う木片や紙ごみまでが有料になっている現在、こうした現金給付は命綱となっています。

サラーム No.128［2024.1.25］